

プラトン『国家』——或る仮説

岡 部 勉

『国家』ⅡⅠX巻を、ソクラテスⅡプラトンのモノローグに等しいものとすることは、未だかつて疑われたことがない。この部分について、人々はこれまで、ソクラテスⅡプラトンが一方的に自説を述べ立て、グラウコンとアディマントスはそれに相槌を打つだけであるとみなしてきた。私はこれを、「ソクラテスⅡグラウコン&アディマントス（SⅡG&A）仮説」と名づけることにする。それが仮説にすぎないものであることは、明らかではないか。何故なら、そのことを論証した人は、誰もいないのであるから。それともそれは、論証するまでもなく、自明の事柄なのであるうか。私にはそうは思われない。むしろ、それこそが、『国家』を読めなくしている元凶なのではあるまいか。私がここで意図しているのは、そのこと、つまり、SⅡG&A仮説は誤まりであって、グラウコンとアディマントスは、単にソクラテスに相槌を打つだけのことをしてしているのではなく、或る意味では、自ら主張し積極的に議論に参加しているのだということ、を、論証することである。

『国家』については、これまでに数多くの矛盾と困難が指摘されてきた。私はここでその上にもう一つ別のものを付け加えようというのでもなければ、それらのうちのどれか一つなり二つなりを、何らか解決しようというのでもない。それらについては、私は次のように考える。——それらは、どれもこれも、SⅡG&A仮説に基づいている。それ故、

プラトン『国家』——或る仮説

プラトン「国家」——或る仮説

もし私の主張が正しくて、S & G & Aであることが論証された場合には、それらが果して問題とされるに値するものであるかどうか、改めて問い直されるべきである。

ところで、私の結論は、恐らく人は容易に信じないであろうが、これまで疑いなく「プラトンの国家」と目されてきたものが、実は最初から最後まで、「グラウコンとアディマントスの国家」であつたということになるであろう。しかも、グラウコンとアディマントスはその国家をよしとする多くの人々の代表にすぎないとすれば、誰の国家かということが問題なのではない。問題なのは、それをつくっているロゴスである。このことに關して一つ注意しておきたいことがある。『国家』Ⅲ巻の或る箇所(389a7)で、ソクラテスはアディマントスに向つて、「君のロゴスに従えば、(それは)受け容れてはならないのだ(*oûk dnoðektou kat'ê tôn aînôloyon*)」と言ふ。この「君のロゴス」という言い方に注意を向けるべきであることは、プラトン自身が指示していることである。なぜなら、これに對してアディマントスは、「あなたが私のロゴスとしたいのなら(*ei sîn, êphr. Boulei ênai tûêuou*)」と答えている(38)からである。そして、アディマントスにとっては、これまで『国家』を読んできた人々にとってそうであつたように、それが、誰の、というよりは、どのようなロゴスかという点は全く問題ではないのだ。「どちらにしても受け容れてはならないのですから」(*oûn ôi dnoðektou*)と続けていることが、それをよく示していよう(38b1)。このロゴスがここで国家を建設しているロゴス(少くともその一部)であることは、言うまでもないことであらう。だが、それは如何なるロゴスであるのか。

— α—同意とβ—同意(369b5~c8)

前について、次のことを確認しておきたい。人が何かをするとき、そうするのが必要だと思つて、そうするというこ

がある。また、そうするのがよいと思つて、そうすることもある。この「必要だと思つて」とか「よいと思つて」とかは、行為に伴う何かなのであるが、それが何であれ、それによつてその行為は、必要とかよいということに、何らか関係づけられることになるとは言えよう。そして、もし必要ということとよいということが異なるとすれば、関係づけとしての「必要と思つて」と「よいと思つて」の方も、当然、相異なるものとなるであらう。しかし今のところは、前者を「 α —同意」、後者を「 β —同意」と名づけておくだけにする。

ところで、今述べたこととの関連で、国家のことが語り出される最初のところ (369 b5 / c8) を問題とするということは、これまで誰もしなかったことであらう。そこでは、先ずソクラテスが、国家の「はじめ (ἀρχή)」は「われわれがひとりずつでは自足せず (οὐκ αὐτάρκεια)」、数多くのものに不足している (πολλὰν ἐνδεήν) ことにあるのではないかと切り出す。アディマントスがこれを承認すると、ソクラテスは「そうするとわれわれは、各々の必要 (εὐχρη) から互に他を求め合い、各々が助け合うことによつて、国家というものをつくることになる」とつづける。

——以上 (369 b5 / c5) は、要するに、必要が国家をつくる原理であるということについての同意承認である。

この同意承認に基づいて、最初の「最も必要な国家 (ἀναγκαϊστὴν πόλιν) がつくられる (369 c9 / e1)」。この同意承認に基づくという点では、少くとも、アディマントスが対話相手である部分 (372 c2) からはグラウコンが対話相手となる。は、そこでつくられる国家が最終的にかんがりの規模になるとしても、そのことに何ら変わりはない。そしてそのような国家が「あるべき (ἀναγκαῖον)」「健全な (ὑγιής)」国家であるとされる (372 e6 / 7)。これに対してグラウコンは、「現在、一般に認められている慣習 (ἄνευ νομιμότητος)」をそこに加えることを要求する。確かにここから話が変わると言えよう。このような国家は、もはや必要 (ἀναγκαιόν) に基づくものではないとされるからである (373 a1 / 5, b2 / 4)。ソクラテスはそれを、「贅沢な (τρυφάσα)」熱で腫れ上がった (φλεγμονώσα) 国家として (372 e3, e8)。この

プラトン『国家』——或る仮説

点に關して、そこでは必要が前より増大しただけではないか、と考える人があるかもしれない。しかしそれはそうではないのである。確かに必要は増大した。だが、それは（現在の）慣習を受け容れたことに由來する。この点が違うのである。

話を元に戻そう。私が問題にしたいのは、最初に必要の話がなされた後、それにすぐ續けて、何気なく挿入されているかにみえる次の一行（369 c7）である。——「その場合、人が互に必要なものをやりとりするのは、そうする方が自分自身にとってよいと思つて、(καί μιν αὐτῶν ἀπερὸν εἶναι) そうするのか。」——アディマントスはこれに対しても直ちに同意承認を与える。しかしここにβ—同意への言及があるというそのことは、何を意味するのか。また、自身にとつてよいとは、この箇所⁽³⁾に注意を向けた人が皆そうとつたように、果して「自己の利益 (self-interest)」⁽⁴⁾のことなのであろうか。これに續く箇所では、先に見たように、もう一度必要の話に戻つて、それに基づいて國家がつくられていくのであるが、β—同意については、その間顧られることが全くない。

しかしながら、遠く離れた箇所（493 c5—6）に於てではあるが、ソクラテスによつて次のように言われていることを、われわれはどのように考えるべきであらうか。すなわち、ここでは、必要ということ (τὴν ἀναγκήν) とよいということ (τὴν ἀρετήν) とは、本当は別であると言われているのである。⁽⁵⁾——今は唯、次のことだけを確認しておくことにしよう。もしそこで言われていることをそのまま受け容れるのであれば、α—同意とβ—同意とは、各々別の事柄に關わるものであるとしなければならぬであらう。このことは明らかである。それ故、その場合我々には、各々の關わるものがどのように異なる⁽⁶⁾とされるのかを明らかにする仕事が残されることになる。両者はどのように異なるのであろうか。その異なりは、S II G & A 仮説を覆すほどのものであるのか。私の予想では、α—同意の線上にあるロゴスとβ—同意の延長上に見出されるべきロゴス（こちらは前者の陰に隠れてよく見えない）とは、全く別のものである。そし

て、このこと、つまり、全く別であるということを示すことが、とりもおさず『国家』におけるプラトンの主要な意図の一つであったと私は考える。もちろん二つは、はじめからもつれ合っている。その点を示すことも、プラトンの意図することであった。むしろ問題はそのもつれからはじまったと言うべきであろう。従って、如何にそのもつれを解くか、如何に前者から後者を浮き出させるかということが、『国家』を読むに当たってわれわれに課せられている仕事の一つなのである。

二 場面 A (493 a6 ~ d7) と場面 B (554 a2 ~ d8)

一般に必要とされているものについては、「それが本当に必要なものであるならば、それはよいものである」と言われよう。子供が何か高価なものを欲しいと言ったときに、母親の口をついて出るのは、「そんなものは必要ありません」であろう。恐らく母親はそれによってこうも言いたいのではないか。——「だからそれは子供にとってよいものではない。」——では、何故必要ないのか。直ちに返ってくる答えは、「贅沢だから」であろう。しかし何がそれを決めているのか。要するに、何が必要なものとそうでないものかを決めているのか。

このことについては、『国家』の或る箇所(493 a6 ~ d8)に従って、先ず次の点を確認しておきたい。つまり、何か「社会通念(*τὰ τὰ κοινὰ δογματὰ*)」のようなものがこれを決めていると言えるところがある。ということである。多数者にとって(この限定を忘れてはならない)、「人々の意向(*τὰ δογματὰ τὰ κατ' ἐπιθυμίαν*)」という形で存在するものが(493 b8)、それを決めているのではないか。また、ここでは、人々の意向の対象、つまり、人々が現に必要とするものが、とりもおさずよいものであり、両者は外延を等しくしているであろう。もう一つ確認しておきたいことがあ

プラトン「国家」——或る仮説

る。それは、以上のような必要なものとそうでないものとの区別は、或る種の教育（端的には子供の躾）に関わるものであるというものである。^(55a)そして、このような仕方ではなされる教育は、例えば母親がそれをするのだとしても、それは、多数者を代行して、その權威を委任された形であるということであろう。そのような教育の典型的な場面を、われわれは、先の母親と子供の例に見出すことができる。それ故、それを「場面A」と名づけることにして、それについて若干のことを、更に確認しておきたい。

場面Aは、人々が必要なものとそうでないものとの区別を、いわば自明のものとして受け容れており、何が必要で何が必要でないかということについては、改めて問うまでもなく、はじめから了解がついている（社会通念とはそういうものである）というようなところにある。また、この場面で、そのような了解に基づいてなされる教育（これを「教育A」としよう）があつて、それは、日常の世界に於て「絶大な強制力（*mighty compulsion*）」を発揮することもある（*192d2*）のではない。一般にその強制力は、教育Aが或る種の自明性を当てにするだけで「ロゴスを持たない」ものであるが故に、有無を言わさぬもの、何か暴力的なものとならざるを得ないであろう。この点を子供の側から見ても、子供は教育が未だ十分ではない。だからこそ必要でないものを欲しがったりするのでと、人は言うであろう。そこで母親が、躾のためにそれを抑止すれば、子供は満たされない欲望をもつことになる。そして、彼のその欲望は、消えないで残っている限り、何らか強制的に抑えつけられていなければならない。

さて、ソクラテスが「寡頭的な人」に関して問題にしているのは、このような「欲望を抑える」ということであると考えられる（*551a2* / *d8*）。これを「場面B」としよう。但し、場面Bで問題なのは、自分で自分の欲望を抑えるというそのことである。寡頭的な人とは、必要でない（それ故に、悪い）欲望を、自己抑制する人のことなのだ。^(551a5)（*551c1* / *d1*）。彼はそうした欲望をもっているその限りに於て、教育のない人間であるが（*551b4* / *c3*）、同時に、「何か自分

自身の暴力的な力によって (*τὴν ἐαυτοῦ βίαν*) それを抑えることができる人間でもとされる (554 d1)。それが暴力的であるのは、そのような人は、「(それ自体が) よくないことだと納得するのでもなく、ロゴスによって (自分に) 言いきかせるのでもなく (*οὐκ πεῖθαι ὅτι οὐκ ἀμεινον, οὐδ' ὑποφῶν λόγῳ*) 別のもの (財産) のことを心配して (*περὶ τῆς ἀλλῆς οὐσίας τρέμειν*)、強制と恐れによって (*ἀνάγκη καὶ φόβῳ*) そうするのだ」からである (554 d2 ~ e)。——以上が、ソクラテスによる場面 B の描きである。しかし、私はそれを、単なる描きだとは思わない。それは、一つの行為のすぐれた分析となっていないか。

場面 B では欲望を抑えるということが問題なのであるが、それは、或る意味では、欲望を消すということに対してあるといえよう。欲望は教育によって消すことができる。しかし、「寡頭制的な人」には教育がないから、消すことはできない。そして、消すことができないから、欲望はある。この円環の中では、彼は暴力的にそれを抑えつける以外にない。それが暴力的であるのは、ここでは必然的なのだ。先の母親が、言うことをきかない子供に対してそうであるように、彼は、自分自身に対してそうある以外にない。母親が子供の手を無理矢理引いて行くように、彼も、そのこと自体の是非を問うことなく、他のもののために、自分自身を無理矢理引いて行くのである。⁽⁹⁾——その彼も、必要な欲望であれば、それを満足させる (554 a5 ~ 6)。しかし、何が必要で何が必要でないかというについては、彼はどのような基準を持ち合わせているのか。簡単にいえば、それは、浪費的 (*ἀναλυστικός*) かそうでないか、得になる (*κρηματιστικός*) かそうでないかということであろう (558 d1 ~ 6, 559 c3 ~ 4)。しかし、これは「寡頭制的な人」の基準でしかない。それによって、必要なものとそうでないものが、正しく区別されることになるとは限らない。

このことについては、もう少し後の箇所 (558 d8 ~ 559 d3) を見なければならぬ。そこでは、必要な欲望とそうでない欲望とが、次のような仕方では区別されている。(1) (生きるために) 不可避的な (*οὐκ ἀν ὅλου τ' εἶναι ἀπορρήναι*) 欲

プラトン「国家」——或る仮説

望と、有益な (558a10-11) 欲望、これが必要な欲望であつて (558d11-e2, 559a11-b9)、その反対であるような欲望、つまり、不可避的でもなければ有益でもないような欲望、それが必要でない欲望ということになる (559a3-b6)。(2) 何が不可避的であり何が有益であるかは、われわれ人間の自然 (559a4-559b5) が決めていることである (558e2-b3)。(3) 不可避的でない欲望は、若いときからの教育 (一応、先の教育 A とは区別して、「教育 B」としよう) によって取り除くことができる (559a3, b9-b10)。——以上のような描き(これについてもまた、私は單なる描きにすぎないとは考へない)は、嚴密さに欠けるところがあるかもしれないが、或る明快さを伴うものではあろう。その明快さはどこから来るのか。

(1) の「不可避的」ということは、個々人の問題ではあり得ない。それは、例えば、私に避けることができるかどうかで決まるというようなものではあるまい。むしろ、何か一般的な仕方で、それは決まっているであらう。そのようなものの一つとして、ソクラテスが例に挙げるパンがある (559a11-b5)。しかし、どうしてもパンでなければならぬということもないであらう。何か嚴密ではない仕方で、そういったパンの類いが、われわれには不可欠だということになっているだけなのである。しかし、そういったものがどうしても必要だということとは、はっきり決まっているのであつて、それがそうなっているということには、確かに或る種の自明性があると言えよう。他方、「有益」ということについても、身体の健康のために何が有益かは、例えばパンの類いがやはりそうだといった具合に、同じように一般的な仕方ですら決まっているであらう (559b3-b4)。また、不可避的なものではないが、健康のために有益であるようなもの (559b6-b7) も、やはり同じようにして決まっているであらう。そして不可避的ということであれ有益ということであれ、それを決めているのは、(2) の自然であるというそのことも、以上の限りではその通りではないか。「生きるために」とか「健康のために」といったことが問題である限り、その点に議論の余地はあるまい。それ故、その描きの明快

さは、一応、このような自然の自明性に由来するものと言えよう。しかし、以下についてはどうか。先ず、「(魂にとつて) 思慮と節制のために (*φύσιν πρὸς τὴν φρόνησιν καὶ τὸ σωφρονεῖν*)」ということが問題である場合にも (559b1)、同じように言つてよいのか。次に、「仕事のために (*πρὸς τὴν ἐργάνην*)」(得になるかどうか) といったこと (559c4) については、どうなのか。三つは区別すべきではないのか。プラトンは区別していないであらうか。だが、この問題は、プラトン理解の根幹に関わる事柄である。それ故、今は唯、次の点を指摘しておくに止める。確かにここでプラトンは、三つを一まとめにして論じているかのである。しかし、少くとも次の二つは区別されているのではないか。その一つは、必要なものとそうでないものとはどう区別されるのが正しいかということである。これには教育(教育B)が関わっていた。もう一つは、「寡頭制的な人」はそれをどう区別しているのかということである。彼にはその教育がないと言われていた。

ところで、(3)の教育Bは、取り敢えずは、不可避的でない欲望を取り除くことに関わるだけのものとして言われていた。しかし、教育Bには、教育Aと違って、或るロゴスが伴っているのではないか。すなわち、ここで必要な欲望とそうでない欲望とを区別しているロゴスがその一部であるような、そして、それについては或る種の正しさ(*ὀρθότης*)を認めることもできるような、そういうロゴスが⁽¹⁶⁾。だが、その正しさについては、ここで端的にそう言われているように、自然がその原理であるということに注意しておこう(それ故、このロゴスを「中一言語」と呼ぶことにする)。このような教育とロゴスが『国家』のどこで語られていたかについては、改めて議論するまでもないであらう。それどころか、『国家』篇全体が、そのようなロゴスによって形づくられているとすら、人は考えるかもしれない⁽¹⁷⁾。私はこれに反論したいのだが、とりあえずここでは、次の点を確認しておくだけにする。結局のところ、教育Bというのは、『国家』II・III巻でわれわれの欲望を「浄化する(*καθαίρειν*)」ものとして (399e5) 語り出された、あの教育(*παιδεία*)と

プラトン「国家」——或る仮説

μυνηστικῆς) のことであらう。⁽¹¹⁾「寡頭制的な人」には、その教育がないのであった。その教育があれば、彼に不必要な欲望が生じることはない。しかし、教育がないから、欲望はある。このような文脈の下に、場面Bは設定されているのである。

三 場面C (N 439 a1 ~ e1 と X 603 e3 ~ 604 d11)

さて、『国家』には、以上とは全く違った、もう一つの場面設定がある。そこでは、「抑える」ということではなくて、「闘う」(しかし、これは、後に明らかにされるように、その場面の一つの描きにすぎない)ということが問題となっている。これを「場面C」と名づけることにしよう。場面Cが、先の場面Bと対比されるべきものであることは、疑う余地がない。何故なら、先には問われることがないとされた(例えば、或る高価なものを欲しがるという)そのこと自体の是非が、ここではとりわけ問題とされることになるからであり、また、これも先には除外されていた、ロゴスがそれにとり関わるかというそのことが、同様に問題とされることになるからである。しかし、場面Cをそれとしてとり出すには、一つの困難が伴う。場面Cには、通常なされる一つの描き、そして、その上に構築された一つの理論が存在して、一般に受け容れられるものとなっているからである。この点を、場面Cについての序説ともみなすべき或る箇所(430 e3 ~ 431 b3)に従って見ておくことにしよう。

そこでは、先ず、「節制(σωφροσύνη)」は「一般には、(自分が)自分に克つことだと言われている(car φανερὴ ἀπὸ πάντων)」ということが指摘される(430 e3 ~ 7)。しかし、この「(自分が)自分に克つ」という言い方はおかしい(γένηται)と、ソクラテスは続ける(430 e11 ~ 431 a1)。何故なら、それによって同じ者が言われているのである限り、自

分が自分に克つ者 (*καίττω αὐτόν*) は、同時に負ける者 (*ῥίττω αὐτόν*) でもあるということになつてしまふからである。それ故、この言い方を、文字通りにとるわけにはいかなないのであつて、それは、われわれの魂が互いに相異なる部分 (優れた部分と劣つた部分) に分かれていて、そのうちの一方 (優れた部分) が、他方 (劣つた部分) に、克つ (*ἐγκρατέω*) とか負ける (*καταρῶν*) と言わんとするものではないかと、ソクラテスは解説してみせる (411a3~b3)。

——このようにして、「魂部分説」は導入されるのである。このことは重要である。それは、「自分が自分に克つ」というような、そのままでは了解不可能である一つの言いまわしに對して、それが或る事実を言い表わしているというそのことを認めた上で、その言いまわしそれ自体の分節に則して、自分の中に相異なる二つの部分があるというふうにならざるに、實質的に読み代えることによって、何とか了解可能なものにしようとする、一種の言語分析に基づく説明の試みなのである。魂部分説は、ここでは、そのような解説言語の地平にあるものとして導入されているのである (この点に關してプラトンは、完全に意図的であつたと考えられる)。

しかし、魂部分説が『国家』に於てそれ以上のものとしてあるということとは、私も認める。いわゆる「魂の三部分説」というのは、確かに、それ以上のものである。だが、それがそれ以上のものであるというそのことは、一体どこから来るのか。それは、結局は、国家とのアナロジーから来るだけなのであるまいか。つまりあのような仕方で導入された魂部分説は、国家とのアナロジーによって、魂の三部分説として正当化されているのではないか。そのような形で、ここでの議論は進められていふと考へられる。そして私がここで指摘しておきたいのは、そのアナロジーによる議論に一つのはつきりした原理があるということである。すなわち、各人には自然の決めた (*κατὰ φύσιν*) 自分の仕事というものがある、各人は決められた自分のことだけをするのがより効果的であり (370c3~5)、また、国家の各部分の場合にも (411c7~10)、魂の各部分の場合にも (411d5~e2)、そうするのが正しい (*Dikeion*) のだとする、「分業の原理」

プラトン『国家』——或る仮説

である。この原理をどう定式化するかは別として、それが α —同意と何らか対をなすものであるということには、異論の余地がないであろう。先に見たように、 α —同意に基づいて国家はつくられるようになるのであるが、その国家が正しく (*Dikaios* = *adikos*)⁽¹⁵⁾ つくられるための原理が「分業の原理」なのである。一方 (必要) を発生原理とすれば、他方 (正義) は構成原理とでも言うべきものであろう。従って、魂部分説は、 α —同意をめぐる話の延長上にあつて、 Φ —言語の枠の中にあるということになる。これを私は、「場面Cへの Φ —言語の侵入」と呼ぶことにする。魂部分説というのは、場面Cにとって、何かそのようなものとしてあるのではないか。これに対して、そのような侵入が阻止されたときに、場面Cがどのような形でとり出されるのか、それを私はこれから問題にしたい。結論を先取りして言えば、それは、 β —同意をめぐる話の延長上に、ソクラテス \equiv プラトンのロゴスとしてとり出されることになるであろう。⁽¹⁶⁾

(場面C その一) IV巻 439a1~e1でソクラテスは、渴きを例にして議論を展開している。先ず、渴きは、端的に飲み物に対してあるということ、つまり、それがよい飲み物であるかどうかといった事柄は、渴いているというそのこと自体からすれば、何ら問題ではないということが確認される (439a4~b2)。⁽¹⁷⁾ 実際、のどが渴いている人は、「何でもよいから飲みたい」と言うであろう。次に、人はのどが渴いていても飲もうとしない (*Epithumia* *ouk* *ellenei* *noutein*) こともあるのではないか (439c2~3) と言われる。これは、場面Cに相当する一つの事実の確認であると同時に、それがその事実の基本的な描写であることの確認でもあると、理解すべきであらう。「それについて何が言えるか」というソクラテスの、それに続く問い (439c5) が、そのことを示しているよう。では、それについて何が言えるのか。魂部分説による説明が直ちになされる (439c5~7)。しかし、それに続く三行 (439c9~d2) は、魂部分説の言語を一切用いていない。⁽¹⁸⁾ もちろんこの場合も、先の基本的描写がその基礎になっている。しかし、それを何らか読み代えることによって、解説言語へと翻訳するといったようなことがなされているわけではない。それは事実を説明しようとするものではないのだ。で

は、何をしようとするものなのか。その前に、そこで言われていることを確認しておこう。——（この場合）一方に、その人に飲むことを禁止するものが（彼に）生じていて（*τὸ μὲν καθ' αὐτοῦ τὰ τοιαῦτα ἐγγιγνεται*）、それは（そうする方がよいと）ロゴスをめぐらせることから（*ἐκ λόγου λόγου*）来るのではないか。他方に、飲ませようとするものが生じていて（*τὰ δὲ ἄγωνα καὶ ἐκοντα*）それは（のどの渇きという）パトスないし病気に由来するのではないか（*ἐκ παθημάτων τε καὶ νοσημάτων παραγιννεται*）。——以上が、そこで言われていることのすべてである。それによると、ここには一方に、彼はのどが渇いているという事実があって、そしてその事実が、彼を飲むことへと向かわせるのである。しかし、それは彼の望みとは無関係である。そうした事実というものは、否応なく生じて来るものではないか（「パトスないし病気に由来する」とは、このことを言うものである）。他方に、彼は飲もうとしないという事実がある。この場合、彼が飲もうとしないのは、単に飲みたくないからということではあり得ない。それでは仮定に反することになる（彼は、現にのどが渇いているのであるから）。それ故、彼は、何らか飲まない方がよいと考へて（ β —同意）、自ら選んで、そうするのだと言うよりはかにないであろう。これは、事実の説明というようなものではない。むしろ、事実関係をより明瞭にさせる仕方、もう一度同じ事実を、分析的に捉え直しているだけではないか。もし仮に、「より明瞭にさせる仕方」というそのことが、そこに單なる事実描写以上のものを持ち込むことになるのだとしたら、そこに持ち込まれることになるのは、実は論理に属する事柄なのだと私は考える。それはそれとして、以上によって、場面Cというのがどのような場面であるかというその点に関しては、或る程度の理解が得られたであろう。そして、それが、先の場面Bとは全く様相を異にするものであるということもまた、同じ程度には明らかにしたものである。しかし、これらについては、もう一つの箇所へと場所を移すことによって、改めて問題にすることにしたい。

（場面C その二）X卷603e3—604d1に於てソクラテスは、今度は別の例を用いて、場面Cの議論を更に展開させて

プラトン「国家」——或る仮説

いる。この議論が前の議論を直接引き継ぐものであることは、その導入部で先の箇所への言及がなされ、それに付け加えて「あのとき言い残したことがあるので、思うに、今度はそれを言い尽くさなければならぬ」(ὁ τότε ἀνελέητοισιν, *oû poi doketi aneleiton sinai deutelein*)と説明されていることから(603d9~e1)、十分明らかである。しかし、何が言い残されたのであるか。この点を見究めることがここでは肝要である。私はそれこそが、魂部分説の否定というまさにそのことであると考える。ソクラテスはここで、場面Cというのは、魂部分説によって説明されるようなものではないということを、見事に例証しているのである。

この例は、立派な人(ἀνὴρ καλός)が、冷静に息子とか友人の死の悲しみに堪えるというものである。⁽¹⁹⁾ 先ず、この例に於ける場面Cは、「(立派な人が)悲しみに堪える」を基本的事実描写とするものであることを確認しておこう。次に、ソクラテスによる、その分析的捉え直し(前半)を見ることにしよう。——その人が冷静であるのは、悲しくないからではない。彼は、実際は悲しいのであるが、唯、節度を守ろうとしている(μετρίως)のである(603e1~9)。ところで、彼が悲しみとよく闘い、それによく抵抗することができるのは、人前でか、それとも自分ひとりだけになったとき(ὅταν ἐν ἐπημέλῃ μόνος αὐτοῦ κατὰ αὐτὸν γίγνηται)であろうか(604a1~4)。そのような人でも、ひとりになったときには(μόνος)人に見られたくないようなことをしたりするのではない(604a6~9)。——以上が、場面Cの分析的捉え直し(前半)である。この限りでは、そこに何らか説明らしいものが入り込んでいるとは及ぶまい。それは、先の基本的事実描写を、唯単に、その分節に即して捉え直しているだけである。そこには、確かに、ひとりになったとき(20)のことが付け加えられているが、これとても、そうした捉え直しの範囲を、少しも逸脱してはいないと考えられる。そして、この点が重要なのであるが、ここでは魂部分説の言語は一切用いられていないことに注意しなければならない。それだけではない。ここに付け加えられたひとりになったと

きのことは、場面Cの魂部分説による説明というものを、完全に否定することになるのだ。何故なら、魂部分説は場面Cの成立を、魂内部の出来事（つまり、どちらでもいいわばその人自身の分身である、二つの相反する欲求ないし力の対立）として捉えようとするものだからである。⁽²¹⁾ それ故、その説の下では、場面Cの成立に関して、ひとりになつたときとそうでないときとで何か違いがあるとすることは、原理的にできないであろう。それどころか、その説は、もしその人が本当に世にいう立派な人（*εὐκατα*）であれば、その人は自分ひとりだけで十分こと足りているのだから、人前であろうとなかろうと、やすやすと悲しみに堪えることができるはずだとするであろう。⁽²²⁾ それに対して、そうでない人の場合には、足りないところがあるわけだから、その分だけ悲しみに抵抗することもできないということになる。しかし、いずれにしても、それは魂内部の問題でしかない。これに対してソクラテスは、そうではないということを、事実によって証示していないか。そしてソクラテスがそれによって指摘しようとしたのは、自分以外のもの、いわば自分の外にあるものこそが、ここでは決定的な意味をもっているのだというそのことであろう。

さて、以上のようにして魂部分説を否定した後で、それに続けてソクラテスは、次のように言う（分析的捉え直しの後半）。——（i）その際、（その人に）抵抗を命じるものは、ロゴスとノモスであり、悲しみへと導くものは、その当のパトスではないか（*601a10-11*）。——先の渴きの例に於て確認しておいたように、渴きとか悲しみとかは、私の望みとは無関係に、否応なく生じて来るものである。そしてそのようなものが、ここで「パトス」と名指されているにすぎない。また、ロゴスとノモスとは、少くとも私自身ではないし、私の部分でもないであろう。それは、むしろ、私を超えた何かなのはあるまいか。ところで、その直後には（*601b3-4*）、（ii）その人には、同じ事柄（悲しみ）に対して、相異なる動きが同時に生じているのだから（*εὐαγρία δὲ ἀγαθήν ἡγεμονεύειν ἐν τῷ αὐτοῦ πάσῃ περὶ τὸ αὐτὸ αἶμα*）、⁽²³⁾ 二つのものが彼になくてはならないとわれわれは言う（*διο ψαμέν αὐτῷ διαγκάνειν*）とある。これを、通常な

プラトン『国家』——或る仮説

されるように、魂部分説の言語として、解することは許されない。何故なら、それら二つのうちの一方は思慮をめぐらす、(τὸ βουλευέσθαι) ということであり、他方はパトスに外ならないからである。⁽²⁴⁾ それらはそのつど、一方は否応なく、他方はそれと「闘う」ために、生じて来るものなのである。そして、生じて来たその限りに於て、それら二つは、共にその人のものとなる。つまり、悲しみはその人の悲しみなのであり、思いもその人の思いなのである。

さて、悲しみに堪えるといったことというのは、唯単に、泣きたくないから泣かないというようなことではないのであって、何らかそうする方がよいと考えて(β—同意)自ら望んで、そうすること以外の方ではあり得ないであろう。このことも、先に確認したことであつた。しかし、ここでは、次のように言われている(604b6~d7、この箇所は「β—同意の構造分析」とでも名づけうる、ソクラテスによる分析の白眉である)。(iii) 先ず、一方のもの(これは、彼に生じた二つのうちの一方であつて、この箇所ではこれについてだけ言われている)は「ノモスに従おうとするものである」(τὸ νόμον ἐπιοῦν πειθεσθαι)と言われる(604b6~7)。次に、ノモスがこの場合何と言うか、それが示される(604b9~d2)。その中で「こうするのが一番よいとロゴスを選ぶ通りに」(ὅτι οὗ λόγος αἰπεὶ βέλτερον εἴκειν)⁽²⁵⁾、自分のことを処理する(τιθεσθαι τὰ αὐτοῦ πρόκλημα)⁽²⁶⁾」というそのことが生じなければならないと言われている(604c6~7)。一方の側に生じるべきであるのは、このようなことなのだ。最後に「ここに生じたものが」最善のものであればそれは(τὸ μὲν βέλτερον)「ノモスの言ふところを明らかにした」以上のようなロゴスの導きに従おうとするものである(τοῦτο τὸ νόμον μὲν εἰδέναι ἐπεισθαι)と言われる(604d5~6)。——ソクラテスは、場面Cに於けるβ—同意を、このように分析している。それは、行為の原理(πρᾶξις)を明らかにしていないか。すなわち、ノモスはその原理であると言われているのではないか。⁽²⁸⁾ そして、そのノモスをわれわれの目に明らかにしてくれるものが、ロゴスの働き(λογισμὸς)にはかならないと言われているのではないか(最初に τὸ νόμον ἐπιοῦν πειθεσθαιと言われ、最後にそれが τοῦτο τὸ

λογισμὸς ἐθέλει ἐνιστάσθαι と言ひ換えられているのは、このことを示すものであらう。ところで、この間の議論のどこにも、「正しい」(δικαιον) という語は登場しない。しかし、ノモスがあるところに「正しいということ」もあるのではないのか。そして、ロゴスはそれを、(われわれにとって) 一番よいこととして、選ぶと言われていると考えられる。

以上が、「あのとき言い残したこと」のすべてであると、私は解する。これによって、場面Cがどのような場面であるかというそのことについては、十分明らかにされたであらう。⁽²⁹⁾そして、この場面Cについての議論は、プラトンによって意図的に、場面Bの「欲望を抑える」ということについての議論の対極に於て、 β —同意をめぐって展開されているというそのことも、既に、十分明らかであらう。私は、この β —同意をめぐる議論のうちにこそ、『国家』に於けるソクラテス＝プラトンのロゴスを見出すべきだと考える。次に、その点に関して、若干補足したい。

四 β —同意

場面Cが成立するためには、何らかの β —同意がそこに関与しなければならない。それは、何度も言うように、唯単に、飲みたくないからとか、泣きたくないからというだけのことでは、決していないのであって、「そうしたい」とか「そうするのがよいと思う」というそのことがなければならぬのだ。そうでなければ、堪えるというようなことは、絶対に生起しえないであらう。それ故、 β —同意は、場面Cの成立がそれに全面的に依存しているようなそういうものなのではあるまいか。そして、それだけが、つまり、「そうしたい」とか「そうするのがよいと思う」というそのことだけが、ここでは、いわば私自身から発動するものであることは明らかではないか。しかも、その発動を妨げる(つまり、「そうし

プラトン「国家」——或る仮説

たい」とか「そうするのがよいと思う」というそのことを妨げる）ものとしては、これまた、私自身を除いては、ほかには何もないのであろう。場面Cは、私自身から発動する、このβ―同意によつて、成立するのである。このことを、β―同意は場面Cの原因（*aitia*）である」と言い表わすことに、何か支障があるだろうか。

ところで、『バイドン』の或る箇所（98e1~99a1）で、ソクラテスは、「（自分が）今ここに、こうして坐っている」との原因について、「アテナイの人たちが、私に有罪の判決を下すことを最善だと思ったこと（*ἐποφείβηντιον*）、それ故に（*οὐκ ἔτατα*）私も、ここに坐っている方がよいと思ったこと（*ἐποι βέλτιον αὐ βέλτερά*）」そして、彼らの命じる刑罰なら何であれ、この地に留つて、それを受ける方が正しい（*βουδύτερον*）と思ったこと」以外にないとしている（98e1~5）。そして、それに続けて、「もし私が、ここにこうしていることの方を、正しいこと（*βουδύτερον*）であり、美しいこと（*καλόν*）であると思わなかったとしたら、私がここにこうしていることもなかったであろう」と付け加えている（98e1~99a1）。ソクラテスが「ここにこうしていること」の原因として挙げているのは、「私（ソクラテス自身）が、そうするのがよい（正しい、美しい）と思った」というそのことである。その前に判決のことが言われているが、それは「そうするのがよいと思った」とこの理由としてである（*οὐκ ἔτατα* がそのことを示しているよう）。もちろん、二つを切り離すことはできないであろうが。ところで、その判決に従うということが、ここでソクラテスによつて正しいこととされ、そして、彼が「正しいと思った」というそのことが、ここでは、「よいと思った」というそのことと並んで、それと同じように原因として言われている。「美しいと思った」というそのことも、それと同様である。このことはどう考えるべきか。——その前に、正しいということについて、次の点に注意しておきたい。すなわち、ソクラテスは、それがアテナイのノモスであるからという、唯それだけの理由で、それに従うことを正しいとしたのではないということである。それとも、ソクラテスは、少しも実質の伴わない、殆んど空虚なβ―同意に基づいて、死を選

んだとも言つのか。そのように考えることは、最後のソクラテス（『弁明』『クリトン』のソクラテス）のβ—同意の
 実質をなすロゴス（これを「ソクラテス」と表記することにする）を、全く理解しないことに等しい。この「ソクラ
 テス」をどう理解するか、これがプラトンの出発点であったとすれば、ソクラテスの死の選択は、プラトンにとって、言
 わば場面Cの原点のようなものであったと考えられる。

さて、『パイドン』の先の箇所は、β—同意が、「よい (agathos) と思って」の代わりに、「正しい (dikaios) と思
 て」とも「美しい (kalos) と思って」とも言い表わされるものであることを示していた（これは、一般にそうだとい
 うことであつて、プラトンがそれらの間の違いと結びつきを見過しているということではない——『国家』はむしろ、
 正しいとよいが、どう結びつくかというそのことを探究の主題としている）。しかし、その基本型とされるべきは、「自
 分自身にとつてよいと思つて」であると私は考える。⁽¹⁰⁾ よいというそのことと、それを何らか限定している「自分自身に
 とつて」が、重要な意味をもつと思われるからである。その限定が何を意味するものであれ、次のことはわれわれにと
 って明らかではないか。すなわち、それは、よいに對してそうするのと同じように、正しいや美しいを限定するものでは
 ないということである。われわれは、普通は、「自分自身にとつて正しい」とか「自分自身にとつて美しい」などと言
 うことはあるまい。言うことがあるとしても、それは、直接正しいや美しいを限定するものではないであらう。これに對
 して、「自分自身にとつてよい」は、普通に言われる。そして、それは、直接よいを限定するであらう（『得になる』と
 か「為になる」等に対してもそうなのだが、その限定の仕方は、「よい」の場合と決して同じではあるまい⁽¹¹⁾）。われわれ
 は、よいに何かそのような限定が付加されることを、むしろ当然のこととしてしているのではないか。だが、「自分自身にと
 つて」というその限定は、一体何を意味するものであるのか。それは、少なくとも、ここでのよいを、「自分の得にな
 る」とか「自分の為になる」(self-interest)とするような、そういうものではない。⁽¹²⁾ ——この点に関しては、『国家』

プラトン『国家』——或る仮説

の中ほどで (505 d3 ~ 9)、ソクラテスによって言われる、次のことが重要である。つまり、われわれは、よいということに關しては、單にそう思われることをでなくて、本当にそうであることを望むという、まさにそのことである(しかし、正しいや美しいについてはそうではない)。實際、自分の利益になる (self-interest) とされたことが、本当に自分自身にとってよいものであるとは限らない。——では、どうするのが自分自身にとって本当によいかを問うことに於て、この「自分自身にとって」という限定は、何らか積極的なものでありうるのか。それにしても、一体自分自身とは何であるのか。それが何であれ、とにかくそれを、「 Ψ 」と呼ぶことにしよう。この Ψ にとって、という限定は、あつてもなくとも構わないというようなものではない。それは、はっきりと、よいということ限定している。そして、 β ——同意の内実は、 Ψ にとってよい、ということそのことをどう考えるかにあるのだ。ところで、プラトンはそれについて、どこでも明らかにすることはなかったのであろうか。私はそう思わない。私の考えているのは、「ソクラテス」のことである。「ソクラテス」はわれわれに、 Ψ にとってよい、ということの何であるかを証していないか。——『弁明』の末尾近くには (41 d3 ~ 5)、次のようにある。「私のこのことは、望むことなく ($\alpha\pi\omicron$ τοῦ αὐτομάτου) 生じたものではありません。そして私には、こうする (死を選ぶ) ことの方が、私にとって、よかったのだ ($\beta\epsilon\lambda\lambda\omicron\upsilon\sigma\theta\eta$ μου) と、わかっているのです (μου δὲ λῶν ἐστὶ τοῦτο)。」

(結語)『国家』の最後で (621 b8 ~ d3)、ソクラテスは言う。「このようにして救われた (καὶ οὕτως, ὦ Ἰθαίων, μὴδὲς ἐσώθη) この話は、われわれを救うものとなるであろう、それをわれわれが信じるならば (καὶ ἡμᾶς αὖ σῶσθαι, αὖ περὶ βλεψόμεθα αὐτῷ)。」そして、次のように結んでいる。「また、私を信じるならば ($\alpha\lambda\lambda\prime$ αὖ ἐμοὶ περὶ βλεψόμεθα)……」思慮を尽して正義を追求することによって ($\delta\iota\kappaαιοσύνην$ μετὰ φρονήσεως παντὶ τρόπῳ ἐπετηδύσασμεν)……われわ

れはよくなく、幸福であることができるであろう (*eu prôdrotoumen*)。——しかし、それは、どの話を信じることであるのか。そして、誰を信じることであるのか。

註(引用文献等の詳細については「付表」参照)

- (1) この主張は別として、この論文はKM講義に多くを負う。以下で述べられることに、何か真実が含まれているとしたら、すべてそれは、そこから得られたものである。しかし、言うまでもないことであるが、誤まりはすべて私の責任である。
『国家』をめぐる一連の私の講義に辛抱強くつき合ってくれた学生諸君、及び、この論文の草稿を読んで多くの不十分な点を指摘して下さい。諸先生方、とりわけ、加藤、松永両先生に感謝する。
- (2) これについては、Sachs, Williams 等を見よ。
- (3) もちろん私は、これだけのことでS||G&A仮説を否定できるなどと考えているわけではない(しかし、今注意した箇所は、単なるレトリックとして片づけることもできないであろう)。
私の主張が立証されるためには、(a)『国家』の中に、全篇を通して截然と区別できる二つの話があるということ、そしてソクラテス||プラトンは一方を主張し他方を退けるということが、少なくとも一つの可能な読み方として、先ず提示されなければならぬが、それだけではなくて、(b)テキストに直接それを証拠立てるものがあるということ、つまり、プラトンがそれを自ら意図していたというそのことを証言するものがあるということもまた、明らかにされなければならない。
- (4) Cross and Wooley, p. 80 は self-interest である。Annas, p. 78 もそれに従う。このことについては、更に註(26)を見よ。
- (5) 原文には *anō diapherei tōi ōnti tōisō. diapherei* の主語は *Lee* がそう解したように *tō dicykaton* と *tō dyadon* である。
- (6) それだけでなく、ここでは *kathō, dikaton, dyadon, dicykaton* は、結局のところ無差別である。多数者の通念にあっては、それらは無差別なのだ。そして、それが、多数者の通念に従うだけのソフィストは、「ロゴスをもたない」ということの意味である。たとえ、現に人々はそう考えているという「説明(ロゴス)」がある(113a6-114c1でソフィストのロゴスとはそういうものだと言われている)としても。
- (7) ここで言われるような「教育」については、112a1-113e1(この間の叙述のクライマックスは113a6-113c8にあると考えられる)を見よ。全体はそのような教育に対する批判である。
- (8) このような場面Bというのは、場面Aと違って、確かに、少数者のところになしか見出されないであろう。そして、これがここ

プラトン『国家』——或る仮説

プラトン『国家』——或る仮説

で(つまり「寡頭制的な人」のところ)問題になっているというそのことには、一つの意味があるのだ。

「寡頭制的な人」と次の「民主制的な人」とは、或る仕方では対をなしている。どちらもⅡ・Ⅲ巻で描き出された教育(*paideia*と *paideria*)⁽⁸⁾がない。両者の違いは、端的に言えば、欲望を抑えるかそうでないかの違いである。そのことに応じて、一方では「必要」が問題となり、他方では「快」が問題となっている。言い換えれば、プラトンはこのようにして、「必要」とか「快」が問題となる場所を見定めているのである。「快」については補註一を見よ。

(9) それ故、彼は平静を保つ人(*diotaiaktos*)とは異なる(551d9)。Williams, p. 202 は、'Inner peace is what Plato must want to have.' もしプラトンが場面Bまでの話しかなかったのだあれば、その通りであつたかも知れない。

(10) この点は、M講義によって鮮明にされた。Williams, p. 203 がこの点に若干注意を向けている。

(11) 最近の註釈者の中で、プラトンのロゴスは *thoe* を原理とするということを強調しているのは、White (cf. pp. 17~24) であらう。

(12) とりわけ *paideria* について、それが或るロゴスを伴うことに關しては、548b1-c1, 549b6を見よ。そのロゴスがどのようなものであるかに關しては、例えば 410b1-412a1を見よ。更に、そうしたロゴスが把握できないうちから(402a2)習慣づけるという仕方(522a3-8)で、その教育はなされると言われている点にも注意せよ。

(13) それは、また、*thoe* *paideria* *traios* *kai* *epidaimon* *epikrateia* とも言われている。「国家」に於て、*epikrateia* と *depractia* が問題となり得るのは、やはりこの場面Cに於てであらう。

(14) これについては、431d2-435c6, 439e2-441c8を見よ。国家とのアナロジーが明確な形をとることになるのは、440d1-6のグラウコンがそのことに言及して以後のことである。私はとりわけそれ以後の議論を、魂部分説の国家とのアナロジーによる正当化の議論とみなす。このアナロジーを支えているのは、一般に、国家のことも人のことも(例えば、「正しい」というような)同じ名前と呼ぶというそのことである(435a5-7, b3-c2)。

もう一つ別の正当化の議論が、435a8-437a1にある。これについては補註三を見よ。

(15) Φ一言語の下では、*dikaios* は *epibios* として理解されることになる。IV巻の「正義論」とは、そのことを描いたものにすぎない。*dikaios* と *epibios* の問題については Kato を見よ。

(16) 従つて、私は魂部分説を、ソクラテス＝プラトンのものではないとする(そして、411b1-3は、端的にそのことを明言しているものと解する)。それが誰のものであつたか(例えば、Burnet², p. 177 の言うように、ピタゴラス派のものであつたかどうか)という哲學史的な問いに対しては、ここでは無関心であつてもよいであらう。

(17) この確認の意味に關しては、掲げているという事実の側には、よりも悪いものないというそのことが重要である。言い換えれば、それは、*epidaimon* のところでよいというそのことを考えるのではないといふこと(従つて、*paideria* *traios* *dyadon* *epidaimon* という言い方(431a1-4)を、よいということについての考察の基礎におかないといふこと)であらう。

- (18) この箇所を読み方については、全面的にM講義に負う(これ以外の点でも、私は多くをM講義から得ている)。このことがなければ、この議論は、もっと別の形をとっていたであろう。
- (19) ここで、これに続く箇所(43d1-8)は、これをもう一度魂部分説の言語へと翻訳し直しているものである。
- (20) この例については、更に、38d1-8を見よ。
- (21) 少なくとも40d1-40d11の間にはないと考えられる(40d5のτοῦ ἡνὲς βέλτερονは、40b1-4で言われる、ここに生じている、もののうちの一方を指す)。特に注意したいのは、εἰς τοῦτο(40b6)とかἐλθέτω(40d5)といった表現は、一方(ロゴスとノモスに従う側)についてだけ用いられているという点である。これに対して、パトスの側については、40d1-10にもそれはない。
- (22) 場面Cに於ける「闘い」の結果がどうあれ、その責めはすべて自分自身にある。このことを部分説言語は、次のように描くしかないのではあるまいか。
- 闘いは自分自身に内的な或る二つの力(ἐνδύναμις)の衝突である(一は通常「欲望」と吹かれ、他方は「意志」と呼ばれる)。そしてその闘いの行方を決めるのは、それら二つの力の強弱の問題だけである。そこに外的な力が何らか関与するとしても、それは問題ではない(そのような力に負けたという場合には、それは不可抗力であったのではないか——アクラシアに関しては、この点が情状酌量されることはいかぬ)。
- (23) 必要の話からすれば、立派な人というのは、「よく生きるために自分自身だけで自足している人(αὐτὸς αὐτῷ ἀντισταναὶ καὶ ἐαυτῷ)として描かれることになる(38d12)。特にそのような人が場面Cにおかれた場合に(そうでない人の場合も同じであろうが)、魂部分説の立場から、ひとりになったときとそうでないときとで何か変わるころがあると、果たして言い得るものであるうか。
- (24) 40b1のαὐτῷ(Burnet)は、有力写本に従って、αὐτῷと読む(その他の点では、すべてBurnetのテキストに従っている)。その理由は、"the two...do not merely belong to the man, but are in him"と云々を理由にしてἐν αὐτῷと読むAdamを全く誤りである。
- (25) 一方の側に生じて来るものについては、40c5-42b、τοῖς βουλεσθεῖσιν καὶ τοῖς βέλτεροι καὶ αὐτοῖς πρὸς ἑαυτά, ἐπὶ τὸ ἴδιον αἰπεῖ βέλτερον καὶ ἐπὶ τὸ ἴδιον τὴν φύσινの三つが言われている。これらが同一同意の構成契機であらう。
- (26) 他方の側に生じて来るものについては、40d1-10を見よ。それは、「ロゴスに関わりのないもの(ἀδύνατον)」と言われている。
- (27) 40d5のτοῦτο καὶ ἡνὲςは、その全体を指すと考えられる。
- (28) これに対して、プラトンはグラウコンに、ἐδιδόκατοと答えさせている(40d10)。プラトンは、意図的にそうしたのではない。グラウコンは、最後まで、ソクラテスのロゴスを、ἐδιδόκατοとして解することしかできなかったことを示すために。

プラトン『国家』——或る仮説

- (28) 『国家』末尾の「エルの物語」(とりわけ 614 c3—d1) は、このノモスについて語っているのではないか。少なくとも、この場合のノモスは、グラウコンの演説 (339 a2—4) にでてくるようなノモスのことではあるまい。
- この点、Kato, p. 4 の問、"Would justice be meaningless for us if there would be no legal affairs in our world?" に対しては、私も meaningless だとは思わないと答える。しかし、これ以上のごときは、ここでは何も言えない。
- (29) 場面 C の定式化、及び、アクラシアに関しては、補註三を見よ。
- (30) Santas, p. 185 は、プラトンの *agatha* の the least misleading translation として "things good for one" を提案する。このことに関する限り、私は彼に従う。
- また 307 b1—6 と c3—6 は二度繰り返される、アディメントスによる『国家』の主題の最終的定式化、*ti poiotea ekairepa ton exoute autō dei autōn ē me kakon, ē dē agathōn eaire* を見よ。これは、正(正しい行為であること)、正しい人であること、正しい生であること等)と不正が、それ自体として、その人自身(例えば、その行為をする人)にとって、何故によいかという、まさにそのことを問うものであろう。
- (31) 「自分の得になる」「自分の為になる」は、self-interest のことである(それ故、この場合は「自分にとって」という限定は、egoism を意味することになる)。それと云うのも、ここで「得になる」とか「為になる」と訳した *epiō* 等は、第一義的には「人の役に立つ」ということであるからだ。そして「人の役に立つ」というそのことは、一巻 301c1—302e1 が示すように(よいというそのことが、本来的に問題となり得ない) *ékxōn* のところで議論されているのだ。
- (32) これに対して、Plato's egoistic theory of motivation を強調する Santas, p. 193⁷ 及び Irwin, pp. 254—256 を見よ。
- (33) White, pp. 54—55 は、それに異議を唱えるが、その理由は私と同じではない。
- しかし「私」が「我」と呼ぶのは『国家』Ⅲ—IX 巻で描かれる *ψυχῆ* の *τὰ ἐν τῇ ἀνδρὶ σιγή πύθη τε καὶ εἰδὴ* (612 a1) のことではない。それ故、Guthrie, p. 152 の *αὐτὴν* 直訳に "to know ourselves is to know the psychic" としてわけにはいかない。
- 612 a3—4 は、*καὶ τὸν αὐτὸν τῶν ἰδίων αἰσθητῶν* (= *ψυχῆς*) *τὴν ἀνδρὶ φέρεται* とある。だが、この *ψ* の何であるかを知る問題と云うのは、*αὐτὸν διακρίνουσαν αὐτῇ ψυχῇ ἀπριστον ὑποποιεῖν* (612 b1—e) と言われたときに解決するような、そういう問題ではあるまいか。

(補註一) 快の問題が登場してくるのは、「民主制的な人」によって(欲望を抑えるというそのことが拒否される)ところ(559d1-562a3)に於てである。「民主制的な人」は、必要な欲望とそうでない欲望との区別を消去して、どちらも「平等に」(ἐν ἰσότητι)満たすべきだとする(561b5, c3-4)。従って、快の問題というのは、α-同意をめぐる話の対極に位置づけられていることになる。しかし、β-同意をめぐる話に対しては、それはどう位置づけられるのか。——「民主制的な人」は、或る種の快楽主義者であるといえよう。少なくとも、彼は自分のすることを、そうするのが快いと思つて、(これを「γ-同意」と呼ぶことにしよう)しているのだとは言えよう。「民主制的な人」の快楽主義をどう定式化するかは、ここでは問題ではない。だが、どのような種類の快楽主義であれ、その定式化を、γ-同意なしで済ませるわけにはいかないのであるということ、しかもそれはその中心部分を占めるであろうということ、このことを否定する人はいないと思われる。ところで、「民主制的な人」の場合、そのような人に固有のロゴスがそのγ-同意に伴うことがあるかもしれない。それはいかなるロゴスであるのか。とりわけ、場面Bと場面Cの各々に於て問題になる二つのロゴスに対して、それはどのようなものであるのか。私が以下で明らかにしたいのは、このことである。

先ず第一に、そのロゴスは、教育Bの「正しい」(ὀρθός)「ロゴス」ではあり得ない。何故なら、γ-同意とは、必要なものとそうでないものとを区別するロゴス(それが教育Bの「正しいロゴス」であつた)が何らか拒絶されているところではなされるはずのものだからである。単に、教育が十分でなかつた結果、そうした「拒絶」ということになつたのであれ、とにかくそれが受け容れられていないということ、そのことは明らかである。ところで、プラトンは、必要な欲望と必要でない欲望とは別に、「不法な」(ἀνόμιμος)「とでもすべき欲望があるとする」(561b1-5)。そして、それを満たそうとするかどうかで、「民主制的な人」と「僭主制的な人」とが区別されることになる。だが、このことは一つの問題を生じさせる。つまり、この場合「民主制的な人」は、不法な欲望からは身を遠ざけているわけであるが、彼は何によってそうしているのかという問題である。単に「幸運によって」(ἐκ τύχης)なのか(561a8前後で、プラトンはこの問題を先取りしてそう言っている)。しかし、「民主制的な人」は、自分自身ではそうは言わないであらう。彼は次のように言うのではないか。「寡頭制的な人は、必要に縛られて自由ではない、僭主制的な人は、不法で墮落している。その中間」(μέσος)「こそが適度」(μετρίως)「というものだ」(562c3-4)。しかし、プラトンはこのような「民主制的な人」のロゴスを、はじめから、「偽りの」(ψευδής)「とか」(ἢ)「紛いの」(ἀναμφύβητος)「ロゴスであると決めたつて」(562c3)。従つて、それは「正しい」(ὀρθός)「ロゴスであり得ないだけでなく、」

「真の」(ἀληθής)「ロゴスでもあり得ないということになる」(562b1-9, 562b7)。何故そうなのか。

実は、その理由は簡単なものであつて、快は「平等」ではないとしなければならぬとしたら、唯それだけで、そのロゴスは「真の」(ἀληθής)「ロゴスではあり得ないということになるのだ。」「民主制的な人」は、快は「平等」であるとする(561b1-4)。それに対して、「民主制的な人」はそれを受け容れないであらうが、次のように言われることについてはどうか。「ἐν μέσῳ αὐτῷ」(それが何を意味するものであれ、ここでは、τὸ μέσῳ αὐτῷ)に対して、比較の上で何らか上位にあるものだという

プラトン「国家」——或る仮説

そのことだけが重要である）によって満たされることの方が、*to hēton ou* によって満たされることよりも、真に満たされていること（*trêsphoric anêstēros*）になる」（585b9-10）。——「真の快（*anêstēs hēton*）」のことが言われる IX 卷 585a8-10 が問題である。この部分で言われているのは、以下のようなことではないのか。

欲望はいつでも、或るものの、それとは別の何かに対する欲望（例えば、私に私の身体への食べ物や飲み物に対する欲望、私に私の身体でない何か（魂）の知識に対する欲望）である（585a8-10 はこのことの確認である）。ところで、欲望を満たすものに、真に満たすものとそうでないものの区別がある（585b9-10）。このことは、食べ物や飲み物と知識等との間でもいえる。そして、そのことに応じて、満たされるものの方（身体と魂）にも、それが満たされたならば、より真に満たされることになるものとそうでないものと区別があるということになるであろう（585b11-12 はこのことを言う）。つまり、それが満たされたときに、真にわれわれ自身が満たされることになるものとそうでないものとがあるということである（*cosmōn and taylor, p. 11*）は、この箇所の *the main thrust* がこの点にあることを正しく指摘しているが、それ以外については、私はことごとく彼らと意見を異にする。それ故、次のような結論を得ることができよう。——今、A によって満たされるもの A'（A' は A と相關的にその何であるかが決まっている）が一方にあり、他方に B によって満たされるもの B' があるとする。そして、A は B よりも、より真に満たすものであり、A' は B' よりも、満たされたときには、より真に満たされたことになるものであるとする。この場合、A によって A' が満たされることの方が B によって B' が満たされることよりも、より真に満たされることになる。その人は、A' の望み（それはとりも直さず、A を望むことである）を「よい欲望」として、A' が A によって満たされることから得られる快をこそ「追求し尊重しなければならぬ」（*χρὴ ἐκτρέφεσθαι καὶ τρέφειν*）とするであろうが（581c1-2）、それだけではなくて、そのような快こそが「真の快」であるとするに違いない（585e1）。

（補註二）585a8-10 の議論は、どのように魂部分説を正当化するか。それは、国家とのアナロジーとは独立に、それ自体として魂部分説を正当化するものであるように思われる。ここでは、「同じものが同じものに対して、同じ事柄に関して同時に、相反することをしたりされたりすることはない」（*τρίτον τιναυτὴν καὶ τὸ αὐτὸ κατὰ τὸ αὐτὸν γε καὶ ἑνὸς τῶτον οὐκ ἰσχυρὸν εἶναι*）ということが言われている（585b8-9, 585e9-10, 587a2）。そして、このことは、この後の場面 C の議論に際して、魂部分説とのつながりで、そのつど再確認されることになる（587b1-11, 602e8-9）。

これが「矛盾律」と言い表わすものであるかどうかを、問題とすべきであろうか。むしろ、587a1-9 で、これをそうだと仮定して（*proleptically*）話を進めようと言われている。そのことこそが問題なのではないか。それは、場面 C の魂部分説による説明にとって前提となっている、一つの仮説なのだ。何故、このことが問題なのか。それは、魂部分説による場面 C の説明とは、結局のところ、如何なるものであるのか、それに対して、それを否定するところに成立する、もう一つの（ソクラテス II プラトンによる）場面 C の分析とは何であるのかということに関して、そのことが或る事柄を告げていると考えられるからで

ある。

詳細な議論は別の機会に譲るとして、その概略を示せば、次のようになる。

(1) 「線分の比喩」のところで、*νῆγοις* と *οὐδυνα* の区別が、*νῆδεαις* をめぐるてなされる (*σιβι—σιβι*)。その限りでの *σιδνα* とは、*νῆδεαις* を *αὐτῇ* とする (*σιβι—σιβι*、*σιβι—σιβι*)。それに対して、*νῆγοις* は *αὐτῇ* の探究としてあるというのが、私の結論である。これに対しては、*οὐδυνα* の対象は奇数とか偶数、或は、三角形とか四角形と言われているではないか、また、*νῆγοις* の方も、それはイデアを対象とするものであることが明言されているではないかと、人は反論するに違いない。しかし、対象が違うというそのことは、*τέχνη—δυναμικ* 論の描きに由来するものでしかないのだ。そして、それをソクラテス—プラトンのものとすることは、何よりもX巻(*σιβι—σιβι*)の構成がそれを許さないであろう。

通常の読みと違って、私は、X巻のこの箇所が「詩人追放論」を主題とするとは考えない。それは、中—言語による虚構にすぎないのだ。プラトンの意図は、それとは全く別のところにある。

(2) X巻では、先ず、*τέχνη—δυναμικ* 論が、戯画的に画き出される (*σιβι—σιβι*)。そこでは神でさえも、*φύσικος* として、つくる対象を限定されている。*μυθῶν* である詩人も、固有のつくる対象をあてがわれている。そのことに応じて、各々の *τέχνη* によって知られる対象も違っている。そして、このような描きの下では、知は、結果としての *ἐπιστήμη* と *τέχνη* と *αὐθεντία* によって、それが本物かどうかが決定されることになる。次に、使う人 (*χρηστὴς*)こそが、もの(行為も含められていることに注意すべきである)のよい悪いを知っているのだと言われる (*σιβι—σιβι*)。それだけではなくて、そうした事柄に関しては、つくる人は *αὐτῇ* を持つだけであると言われる (*σιβι—σιβι*)。ここで言われているのは、*τέχνη* を持たない人のところこそ、知はある意味では完全に破綻することになる。何故なら、ここで言われているのは、*τέχνη* を持たない人のところこそ、知はあるということなのだから。しかもここでは、知 (*ἐπιστήμη*) と *αὐθεντία* は、同じ対象に関わるとされた上で、異なるものとして言われているのである (*δυναμικ* 論の文脈のうちにあるV巻(*σιβι—σιβι*)では、対象が違うと言われていた)。そして、この後の *σιβι* から *σιβι* は、*τέχνη—δυναμικ* 論とは別の文脈にある知についての議論を展開しているのである。すなわち *νῆγοις* をめぐる議論である。プラトンがこの箇所を、VII巻(*σιβι—σιβι*)前後の *νῆγοις* に関する議論を思い出させることからは始めているのが、その一つの証拠である。

では、その *νῆγοις* をめぐる議論とはどのようなものなのか。それをそれとして取り出すためには、V—VII巻(とりわけ「三つの比喩」)を、*δυναμικ* 論の文脈から切り離して読むことが重要な課題となる(その際、とりわけ対象が違うというそのことは、*δυναμικ* 論から来るのだということに留意すべきである)。*νῆγοις* (醒めている)と *νῆγοις* (夢見ている)の区別は、そのための道案内としてプラトンがおいた目印である。

(3) V巻(*σιβι—σιβι*)は、全体としては *δυναμικ* 論の文脈のうちにあるのだが、その最初のところ (*σιβι—σιβι*) だけは違ってい

プラトン「国家」——或る仮説

のである。また他方の側に、(2) 当事者によってなされる(それと「闘う」ことについての)、 β —同意がなければならぬ。私はこの β —同意を、場面C成立の原因とした。——以上の二点を、先の議論は、当然認めなければならないのであり、そして、それだけで十分なのであると私は考える。しかし、(1)と(2)の各々について、幾つかの点を補足したい。

(1) 「否応なく生じて来るもの」については、一応、それを「パトス」と総称出来よう。だが、場面Cは、「パトスに対して闘う場面」と規定されるだけのものではあるまい。それは、もっと広い範囲で成立し得るのではないか。 β —同意を發動することによって、それに抵抗しなければ、自分自身の望みとは無関係に或る一つの行為をすることとなる、そういう場面のすべてがそこに含まれるべきであろう。この場合、その行為が自分自身の望みとは無関係なものとしてある(但し、その人は、このまま行けば自分が何をすることになるのか、それが分かっているものでなければならぬ)というそのことは、場面Cの定式化にとって重要である。これに対して、通常の描きの下では、ここに生じるものは(パトスではなく)「欲望」とされるであろう(III 67には、*bonheur humain est toujours le contraire de la souffrance* とあるが、これはプラトンが意図的に通常の描きをしたにすぎない)。その結果、(その「欲望」に「負ける」ことによってなされた)行為は、たとえそうであっても、自らの望んだものとなるであろう。しかし、そのように描くのである限り、場面Cは場面Bと何ら違わないものとなってしまうのだ(また、*no conflict in practical reasoning* というようなものがどこかにあるとしたら、それもまた場面Bに近いものとしてであろう。それ故、私は *different notions of goodness* を主張すること、言い換えれば、*commensurability* を否定することに、救いを見出そうとする人々の考え方には、一切同意しない)。

ところで、われわれはいつでも、そこにそのような仕方では生じて来ているものに対して、 β —同意を發動することができずだと考えられる。それ故、場面Cは、われわれの自由に委ねられているのだ(しかし、強迫によってそうせざるを得ないとか、薬のせいなどで自分自身何をしているのか分からなくなっているような場合には、もちろんそうではない)。

(2) β —同意を場面Cの原因とすることについては、アクラシアが事実として存在するということに、そのことは矛盾するかのようには思われよう。何故なら、アクラシアとは、 β —同意がなされているのに場面Cが成立しない場合のことであると、とりあえずは、考えられるからである。アクラシアは、次のように規定されるのではないか。すなわち、それは、「そうするのがよいと思っている(β —同意)のに、そうはしないで、それとは別のこと(否応なく生じて来ているそのこと)をすること」である——私はこのようにアクラシアを規定する。これによると、アクラシアの場合にも、一方に否応なく生じて来ているものがあり、他方に β —同意があつて、先の議論からすれば、当然、場面Cが成立するはずだといえることになる。実際、場面Cが成立する可能性の全くないところでは、アクラシアも不可能であろう(アクラシアは場面Cと相關的なのだ)。その可能性があつたからこそ、人はアクラシアを非難したり、後悔したりするのではないか。それ故、アクラシアとは、場面Cが成立するはず(或は、成立し続けるはず)なのに、或る何かのために、現実には成立しないことなのであると考えられる。その何か

プラトン『国家』——或る仮説

について、私は以下のように考える。

アクラシアの場合、 β —同意は、本当はなされていらないのだと考えることはできない（もしそうだとすると、場面Cの成立する可能性はなくなってしまう）。そうではなくて、それは、いわば括弧に入れられて、宙に浮いた形になっているのだ。つまり、現実には効力を發揮できない状態にされているのだ（人が後になって、「分かってはいたのだが」とか「知ってはいたが」と言うのは、この状態を指す）。もちろん、自然にそうだったのではない。何かがそうさせたのである。その何かの働きは、ソクラテスのダイモン（正確には、*to daimonion*）のそれに似てはいないか。ソクラテスのダイモンもまた、ソクラテスがそうしようとしていた（その限りで、この場合にも β —同意が何らかなされてはいたはずだ）そのことを、実行に移す前に中止させるものであろう。しかし、ダイモンであれ何であれ、そうした何かによって、全面的にそうさせられたというのではない。何故なら、それに従うことによって、 β —同意を括弧に入れ、宙に浮かせてしまうのは、結局は自分自身でしかないのだから。ダイモンの声に従うかどうかを決めるのは、ソクラテス自身である（*phil*の「自分自身がダイモンを選択する」とは、このことを言うもの）。アクラシアを生じさせるのは、この、 β —同意に対する、自分自身の或る働きかけである。そして、それ故にこそ、アクラシアは非難され後悔されることになるのだ。

従って、アクラシアとは、場面Cを成立させる β —同意が完全でなくて、欠如している部分があるということではないのだ。むしろ、それに余分なものを付け加えることなのである。そして、何かが私に、そうするように命じたのだ。それについては、結局のところ、或る何かとしか言いようがないであろう。それは、ロゴスを拒絶する、*irrational*なものなのである。それ故に、アクラシアは、*irrational*な行為であるということになるのだ（Davidson, pp. 41-42が、アクラシアの *irrationality* を強調している。これについては更に Davidson²を見よ。しかし私は、魂部分説を枠組としている彼のアクラシアの分析には、全体として従わない）。そして、この *irrational* な何かのために、アクラシアは、自分自身がしたことであるのに、自分では弁明できないものとなるのだ。しかも、弁明できないというそのことが一番よくわかるのも、自分自身であろう。

付表

KM講義 加藤信朗先生の熊本大学での集中講義（昭和五十七年十月）——その第一日目については、「行為の根拠について（1のi）——『ニコマコス倫理学』第七巻のアクラシアの説、および『プロタゴラス』篇の快樂説に即して」（東京都立大学『人文学報』第一六一号、昭和五十八年二月）を見よ——と松永雄二先生の東京都立大学での集中講義（同十二月）を指す（M講義は後者を指す）。*

Adam, J. *Plato's Republic*. Cambridge: C. U. P., 1902.

- Anas, J. *An Introduction to Plato's Republic*. Oxford: Clarendon Press, 1981.
- Burnet, J. ed. *Platonis Opera*. Oxford: Clarendon Press, 1900~7.
- Burnet, J. *Early Greek Philosophy*. 4th edn., London: Black, 1930.
- Cross, R. C. and Wooley, A. D. *Plato's Republic: A Philosophical Commentary*. London: Macmillan, 1964.
- Davidson, D. 'How is Weakness of the Will Possible?', in J. Feinberg, ed., *Moral Concept*, Oxford: Clarendon Press, 1970, and in Davidson, *Essays on Actions & Events*, Oxford: Clarendon Press, 1980.
- Davidson, D. 'Paradoxes of irrationality', in R. Wollheim and J. Hopkins, eds., *Philosophical Essays on Freud*, Cambridge: C. U. P., 1982.
- Gosling, J. C. B. and Taylor, C. C. W. *The Greeks on Pleasure*, Oxford: Clarendon Press, 1982.
- Guthrie, W. C. K. *Socrates*, Cambridge: C. U. P., 1971 (first published as part 2 of *A History of Greek Philosophy*, Volume III, Cambridge: C. U. P., 1969).
- Irwin, T. *Plato's Moral Theory*, Oxford: Clarendon Press, 1977.
- Kato, N. 'On Dikaion' (united).
- Lee, H. D. *Plato, The Republic*, Harmondsworth: Penguin Books, 1974.
- Sachs, D. 'A Fallacy in Plato's Republic', *Philosophical Review* LXXII, 1963, and in G. Vlastos, ed., *Plato II*, New York: Doubleday, 1971.
- Santas, G. X. 'The Socratic Paradox', *Philosophical Review* LXXIII, 1964, reprinted in Santas, *Socrates*, London: Routledge and Kegan Paul, 1979. (引用は終巻249頁)
- White, N. *A Companion to Plato's Republic*. Oxford: Blackwell, 1979.
- Williams, B. A. O. 'The Analogy of City and Soul in Plato's Republic', in E. N. Lee and others eds., *Exegesis and Argument*, *Phronesis Supplement* I, Assen: Van Gorcum, 1973.

* K M 講義に関しては、更に、松永雄二「くろくく(善)とくろくくのことへの接近——行為と徳(アレテー)にかかわる知の問題をめぐる——」(九州大学哲学研究室編『行為の構造』第二章、昭和五十八年四月)、加藤信朗「知と不知への関わり——『カルミデス』篇における知の問題」(『理學』第六〇一号、昭和五十八年六月)を見よ。